

ONE LOVE

通信

69号

2020年12月6日発行

ワンラブランドを失い、この先どうするべきかをひたすら考えた年だった。でもその答えは最初から出ていたような気がする。つまり再建する以外の答えはなかった。虐殺後のルワンダで義足を作り始め、今まで続けてきたワンラブ。未だ義足を必要としている人がたくさんおり、彼らを支えることが私たちの使命だ。

今は義肢製作所再建のために動く。出来上がったら、また次のことを考えよう。そんな再建のためのクラウドファンディングに現在挑戦中です。皆さまのご協力をお願いします。



【ワンラブ再建に向けて。】

こうなってしまったものは、もう仕方ない。ジタバタあがいたところで、壊された建物が元通りになるわけではない。こんな時、諦めが早い性格で良かったと思う。いつまでも恨みつらみを持ち続けても、取り戻せないものがある。補償のないまま壊されてしまったものに対して、政府にそれを要求し続けはする。それは私たちだけでなく、今回立ち退きを強いられたこの地域の人たちすべてが同じだ。

でも今私たちがやるべきことは、義足を手に入れられずさ迷っている障害者たちに対して、また義足を作るということだ。それにはつまり新しい義肢製作所の再建が必要となる。

だからそのためにまたスタートだ。ゼロからやり直したけど、きっと思いは目的に近づくはずだ。ワンラブ再建計画、こんなふうに進んできた。

私は建築費用を集めるために 3 月に帰国した。でもコロナのため、予定が大幅に狂った。話をさせてもらえると

ころのキャンセルが相次ぎ、歩き回っての資金集めはできなかった。でもできることをと、アフリカ布で作ったマスクを売ったり、ルワンダから持って帰った民芸品やコーヒーなど、そして帰国に合わせて作ったルワンダの象徴ゴリラTシャツを売って、お金にしていた。それと同時に、SNSを通じて資金の協力を伝えていった。なかなかすぐには資金を集められなかったけれど、それでも反応してくれる人がある。毎日ちょっとずつ支援が集まった。

予定では 6 月に入ってからすぐにルワンダに戻るようになっていたが、コロナの感染拡大を防ぐため、飛行機が飛んでいない。航空会社に予約を入れてはキャンセルが続いた。大したことができないまま、時間だけが過ぎて行く。私の焦りは、もう一方でルワンダにいるガテラの奮闘に対して、何も補佐できないという焦りだった。ガテラは私がこうしている今も、毎日のようにワンラブランドの廃材を集めては売り、あるいは新しい義肢製作所で再利用するために運び出したりしている。ワンラブランド・荷物を運びこんだ一時的な代替地、新しい建築現場、そして引っ越した仮の



住まい、この4か所を移動しながら、過ごしている。そしてきつと朝早くから動き出し、ろくに食事もとっていないだろう。そんなことが想像できるから、日本にいて、ただインターネットを使って物を売ったり、人とやり取りしているだけの自分が設立たずのように感じてしまった。電話をすると、ガテラはご飯もきちんと食べているし、コロナのせいで人がたくさん集まったり、夜遅くまで仕事をすることもできないから、適当に体は休めていると言っているけど、それが嘘だということもわかっている。

だから早くルワンダに戻り、せめてご飯を作って、食べてもらえる状況だけでも整えたいと思った。でもそれできなかった。飛行機が飛ばなければ、帰りたくても帰れない。いたずらに2か月近くが過ぎ、夏の季節だったのでせっかくだから茅ヶ崎の海岸に足を運び、砂浜に腰かけてぼーっと海を眺めたりした。

そうしているうちにやっと空港再開の目処が立ったが、今度は入国の条件として、入国72時間以内に受けたPCR検査の結果を持って入るべしというのが付け加えられた。日本からルワンダまで飛行機で移動するだけで約24時間かかる。だからそのタイムリミットがタイトな条件をクリアするのも大変だ。

そんなふうにあれこれがいってやっと着いたルワンダ。5カ月ぶりだ。

ガテラは痩せていた。私が日本に停滞し、7キロ近く太ったにもかかわらず。家の中はそれほど荒れていなかった。きつと荒らす暇もなかったというのが正しいのだろう。

まず見に行ったのはワンラブランド。日本にいる間中、再びここを見た時自分は何を感じるだろうかと不安だった。つまり今まで自分たちが20年過ごした場所が、見るも無残な姿になり、ものすごい喪失感に襲われるのではないかと。でも意外だった。喪失感はない。なぜかと言うと、壊されてもなおガテラはそこを手入れし、切り取った竹でベンチを作り、木を植え、人が集えるような場所にしていたからだ。



ワンラブランドは不滅です！
壊されても、奪われてもなお手を加えるガテラ。
切り倒した竹を使ってベンチを設置してみました。

思った。この人は懲りない人だなあって。もう二度と自分たちのものにならないとわかっているのに、それでも木を植える。自分たちがそこにいた証を残しておきたいのだ。

だから5カ月経って、ワンラブランドを見て、なんだかそこがもともとそういう場所だったような錯覚に陥り、喪失感がなかったのだ。それを黙々とやっていたガテラの姿を想像すると、胸の痛みと自分の無力さ、そして愛おしさを感じる。

そして次に行ったのは、新しい義肢製作所の建築現場だ。

5カ月の不在期間中、ガテラはここでも動いていた。私が日本に向かった時は、ほんの基礎しかできていなかったのに、塀を作り、鉄筋の入ったセメントの柱もできていた。それを私に見せる時のガテラの得意そうな顔。その顔を見て、やったことを褒めないわけにはいかないではないか。

丘の中腹にあるその土地は見晴らしも良く、今までさんざん苦労させられた水害の心配もない。それは何よりもありがたい。ここに都合3階建ての建物が出来上がる。この地域に建物を建てる条件として、道のレベルから2階建て以上にしなくてはいけない。土地の都合上、道は土地よりも高い位置にあり、私たちが建物を建てようと思ったら、都合3階建てにしなくてはいけないのだ。

1階部分は義肢製作所と事務所・歩行訓練をする場所・倉庫、そして遠くから障害者や人が来ても泊まれるような部屋。2階にはカフェと、申し訳ないような気もするが、自分たちが住むスペースも作る。家賃を払ってどこかを借り続けるよりは、ここに住んで、常に義足作りを身近に感じ、要するに目を光らせていたいからだ。そして3階にはいくつか部屋を作る。ここはいわばシェアハウスのようなものをイメージしている。共同の台所とサロン、そこにみんなが集まって、それぞれの部屋で暮らすような。



ワンラブランドから持ってきたレンガ再利用中。
使えるものは徹底的に使っちゃう。

今までのワンラブランドが広すぎたからなのか、土地がすごく狭く感じる。もっとも1.5ヘクタールもあったから、狭く感じるのは当然かもしれない。だから残念ながら庭と呼ばれるものは非常に小さい。でも自分のイメージとしては、そこで日本の甘くておいしいトウモロコシを作ったり、大葉なんかを育てて、食卓を豊かにしたいなあなんて思っている。

その代り見晴らしは良い。向こうの丘のてっぺんを見れば、キガリ市内が目に入り、そんなことは全くないのだけど、キガリを手に入れたような気分になったりする。

去年の暮、洪水の被害を受けてから、今年になって強制撤去。本当にたくさんのことを考えた。自分たちがどうするのか。どうしたいのか。

ルワンダの人たちは、私たちがこんな仕打ちを受けただけで、政府からバッチリ補償ももらったので、ルワンダから日本に逃げ、二度と戻ってこないだろうと思っていたらしい。実際今回の件とは別に、虐殺後外からルワンダに戻り、さまざまな投資をしたルワンダ人が、政府やビジネスにおいて理不尽な扱いを受け、ルワンダを捨て、また外国に戻っていった人たちも多かった。でもガテラがまた建物を作り始めたので驚き、そしてワンラブランドに再び木を植えているのを見て、半ば呆れている。

ワンラブランド周辺は、相変わらず大雨が降ると川が氾

監している。政府は水害対策工事が進めているが、素人でもわかるような計画ミスをしており、どんなに河岸工事をしたところで、基本的なことを整えないと、いつまで経っても川の氾濫は続くだろう。

ワンラブランドがあったところは、以前から「ラストの所」という名称で呼ばれており、きっとこれからもその名前で呼ばれ続けることだろう。これは実に爽快だ。だってどんなに壊してその場所が姿を変えようとも、それがその場所の名前になっちゃったのだから。撤去に関わったすべての政府の人間は、その名前を聞くたびに複雑な思いをするに違いない。ざまあみろなのだ。

そんなわけで、今は新しい義肢製作所の再建に向けて動くのみ。ワンラブランドを作った頃は、まだ自分たちも若かったし、いつかそのうちできるだろうと思って取り掛かっていた。でも20年間そこで過ごした時間は、確実に自分たちの年齢に出てきている。だから今度の義肢製作所建設は、そんなに悠長なことと言ってられない。何よりも、義足を必要としている人がたくさんおり、いつまでも小屋を無理やり改造した仮の義肢製作所では手狭なのだ。第一、壊されて、もうワンラブはなくなったと思っている障害者たちもいて、無償で義足を手に入れる場所はないと思っ

と違って、少し焦って動きたい。

いろいろとあったこの1年。かなりきつい1年ではあったけど、最初に書いた通り、こうなってしまったものは仕方ない。だからそれをひたすら受け止めて、先に進んでいきたいし、2021年は多かれ少なかれ何らかの変化があり、それは自分たちにとっては良い変化で、その変化をずっとワンラブを支援してくれた人たちにてもらいたい。だからそのためにもうひと踏ん張りします。

そして現在、新しい義肢製作所建設資金を集めるクラウドファンディングに挑戦中です。建物全体を完成させるためには3000万円の資金が必要となりますが、まずは義肢製作所完成資金の一部として600万円を集めようとスタートさせました。ありがたいことにこの目標はクリア。そして更なる建設を進めるため、目標金額を800万円に上げ、来年1月15日午後11時まで挑戦を続けます。

このクラウドファンディングでの支援方法は、インターネットから行うので、郵便局や銀行に足を運ぶ必要はありません。だからインターネットさえ使えれば、手間はかかりません。

どうぞワンラブの再建のために皆さまの力を貸してください。またこの挑戦をご家族、ご友人などにもお伝えいただき、より多くのご協力が得られるよう広めてください。よろしくお願いします。

クラウドファンディングの詳細は以下のURLから、もしくは右のQRコードから↓⇒

<https://readyfor.jp/projects/rwandagisokusaikenon-elope/comments>



ルワンダ事務所代表ガテラより

【いつになったら。】

暇にならない。暇になったら一日中寝ていたい。

俺の目下の目標は義肢製作所を完成させること。そのためだったら何でもやるぞ。でも毎日たくさんの人を動かして、サボらないように目を光らせ、資材を買いに行き、お金の管理もしてというのは、やはり大変だ。

マミも戻ってきて、楽になったこともあるけれど、仕事の上では対立することも多く、陰湿なムードになることもよくある。外でも人に疲れ、家に戻っても気を抜けない。マミはマミで石頭のところがあるから、対立しても一歩も引かない。そんな時は夜ご飯の食卓がちょっとわびしい。品数が一つ減ることもあるが、何よりも会話のない食事は寂しい。

でもそれもこれも、お互い妥協をしたくないからだ。俺には俺の理想があり、マミにはマミの理想がある。そこをうまく組み合わせて、新しいものを作り上げたい。

それが出来上がった時こそ、自分たちが本当に落ち着いてこの先のことを考えられる。その日はいつ来るかなあ。できることなら、なるべく早くその時が訪れてほし

いものだ。ひたすらその時を待つ。

そうだった時の俺の夢。できればキャンピングカーなんかがあれば嬉しい。それに乗って、世界中を回るのが。そして行った先でワンラブのことを話し、協力を求める。車の中には台所もトイレもシャワーもあって、行きたいところに行く。インターネットなんかもいつでもつながるような状態にしておいて、マミはそこで仕事だ。

ということを使うと、マミは嫌がる。車の中でなんか仕事したくない。それにどこか知らない土地に行きたくないと。

ふん、ロマンのない奴め。世界中が仕事場になるんだぞ。ルワンダなんてちっぽけなレベルではなくて。そんなこともわからないのか。これだから女ってやつは...

と、いつ実現するかわからない夢を見ているが、夢を夢で終わらせたくないというのが俺の本音だ。

まあとにかく今回出てきた試練に立ち向かうとするか。それを片付けてからでないと、気持ちも落ち着かないしな。できれば来年の前半には義肢製作所の引っ越しは済ませたいものだ。そしてそれは夢ではないと信じている。

できる、絶対にできる。そして絶対にやるのだ。俺には半年後のワンラブが見えている。今度のワンラブ通信、楽しみにしてくれよな。

【日本からルワンダへの帰り道。】

世界中がコロナの渦に巻き込まれ、みんなそれぞれ対策を打ちながらの毎日。コロナ疲れもあるだろうが、とにかく治まるまでは、それに対応するしかない。

今回のコロナで失ったものはたくさんある。まず予定が狂ったこと。これはすべてを総括した表現になる。日本での変更は全く狂った。ルワンダの小学生と校長先生を日本に連れて行き、長野の小学校のみんなと交流させる計画が飛んだ。航空券も買ったし、日本行きのピザもとったのに、直前になり校長先生がコロナがはじまっている日本に子供を連れて行くわけにはいかないといい出し、キャンセルとなった。その頃はまだ私自身も大したことないと考えていたので、何て大げさな…と思っていたが、あれよあれよという間にコロナは世界中に蔓延してしまった。



日本に行くはずだった男の子。お父さんも嬉しそうだったのに…。とても残念。

そして私がコロナを体で感じたのは、日本からルワンダに戻れなくなったことだ。人の移動に伴いコロナも移動するとあっては、飛行機も飛ばなくなるというもの。ルワンダも国際線の発着を止めた。それでも私はそのうち再開するだろうと思ったら、2 カ月以上も日本滞在を延ばす羽目となった。

そしてやっと8月に空港再開という情報を得た。ルワンダ政府が発表した情報なので、確かな情報に違いない。

更なる情報を探す。ルワンダ入国の条件として、入国前の72時間以内にPCR検査を受け、陰性証明書を取るべし！しかし世界がやっと開き始めた頃。PCR検査をする病院も少なく、発症したわけでもない任意の検査。ましてや検査後すぐ証明書を出してくれるところは都内に1つしか見つからなかった。日本からルワンダまで24時間。しかも今回予約を入れた飛行機は、乗り継ぎのためドーハで22時間待たなくちゃいけない。つまり検査を受けて証明書をもらう時間の猶予は24時間しかない。やっと見つかった病院に予約を入れ、久しぶりに電車に乗って病院へ。そこは即日証明書を出してくれるという。しかし検査費用4万円ほど。きついな〜。検査自体はあっという間に済み、あとは夕方まで時間をつぶすだけ。なんだけど、これが辛かった。若い頃は東京を満喫していたが、今はまったく関心がなくなり、どこで何をしても良いかわからない。しかもまだ朝の9時なのだ。夕方4時まで何をしろと？コロナだからいろんな施設も開いておらず、まったく困った。

では本屋にでも行って立ち読みしながら過ごそうと思って、京橋からその近辺の大きな本屋までテクテク歩いたのだけど、コロナで体がなまっているのね。歩くのがしんどい。しかも久しぶりに靴をきちんと履いたものだから、

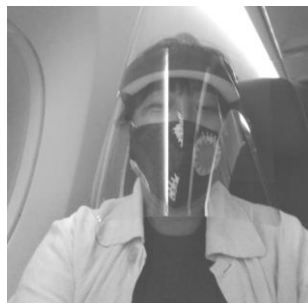
靴擦れでマメができてしまって痛い。やっと本屋についたものの、足が痛くて本を物色する気にもなれなかった。だから仕方なく本屋のすぐ横にある、サラリーマンがそこでお弁当を食べるようなベンチのある野外スペースに行って、自分が持っていた本を読んだ。多分5時間近くはそこに留まっていたと思う。そうしてめでたく証明書ももらい、晴れてルワンダに堂々に入れることになった。

翌日成田空港。いや〜、時間が遅いこともあったけど、まったく人がいないのですね。中も暗い。とにかく空港内の人の数がすぐに数えられるくらいなのだ。こんな空港は初めてだぞ。

持っていた荷物は、既に10キロオーバーで超過料金も払ったのだけど、気がつけば手荷物が重すぎてダメ！と断られ、スーツケースに入れ替えたら、さらに10キロ近くオーバーしたけど、空港のお姉さんは超過料金を請求せずにチャラにしてくれた。ありがと〜！

搭乗手続きも終わり、さて、では乗る前に夕ご飯を…と思ったら、空港のレストラン、ほとんど開いてないのです…。せめてマクドナルドは…と思ったら、そこも既に閉まっている。空腹で悲しくなり、コンビニでサンドイッチとカレーパンを買って、人のいないロビーで食べた。

飛行機に乗る前にフェイスシールドをもらった。乗っている間はマスクと、このフェイスシールド着用のこと。生まれて初めての経験だったので、窮屈だったけど、それはそれで楽しませてもらった。機内のサービスはいつもより簡素だった。



フェイスシールドとマスクで感染予防中。さすがに食事の時はフェイスシールドを取っても良いとのこと触れが出ました。お土産にガテラに見せようと思ったら、キガリの空港に置き忘れた…。

ドーハで乗り換え。そしてここから崩れ始めた。ドーハの乗り継ぎは予定では22時間。つまり空港内に22時間軟禁されるのだ。しかもここにも人がほとんどいないので、開いているレストランが限られていて、それだけでも悲しい。22時間もここで何をしろというのだ。かろうじて開いていたフードコートでハンバーガーを買った。やれやれ、やっと5時間が過ぎたわいと思いながら、出来上がったハンバーガーを持ってテーブルに向かったら、お盆が傾き、乗っかっていたコーラを、あろうことか自分のジャケットにぶちまけてしまった。ああ…。回りの人は持っていたティッシュなどを分けてくれたが、派手にジャケット・ズボンが濡れた。悲しい思いでトイレに向かい、ジャケットを脱ぎ、洗った…。何が悔しくて私はドーハの空港で洗濯をしているのだ。

濡れた服が乾くの待ちながらひたすら時間を過ごしていたら、空港のグランドスタッフが声をかけてきた。あなたはキガリに向かう乗客の一人であるかと。そうだと答

えると、あんたのキガリ行きの飛行機はキャンセルになった。つきましてはケニアのナイロビ経由でキガリまで行ってくださいと。つまりナイロビまで行って、そこからまた飛行機を乗り換えてキガリに行きなさいよということだ。幸い出発時間が早まるので、空港で無駄に時間をつぶす必要がなくなったが、ナイロビから先の航空券は、そこに着いてから手配されるらしい。しかしナイロビ到着は夜中だ。そんな時間に空港職員がいるとは思えない。しかもアフリカのいい加減さで、本当にキガリ行きの航空券が手配されているという保証はない。この先も勝負が続く。

到着したナイロビは案の定暗かった。電気の消された通路を歩き、トランジットカウンターに行っただけ誰もいない。そうだろうなあ。この時間にケニア人が仕事をしているとは思えない。私と同じようにドーハからナイロビに連れて行かれ、ルワンダに向かうのは4人。そりゃ飛行機もキャンセルになるわな、この人数じゃ。

カフェに入ってひたすら時間をつぶし、朝日が昇るのを見て、9時近くになってやっと職員が動き始め、搭乗券をもらうことができた。この道中、朝日を見るのは2回目だ。

長いルワンダまでの旅。今回は結局ほぼ丸二日かかった。到着後PCR検査の陰性証明書を見せて、無事に入国。そしてやっとガテラと再会！と思ったが、空港での送迎はダメ！禁止です！とそのまま隔離されるホテルへ直行。

ホテルでまたPCR検査を受け、24時間の隔離。もちろんそれらは自費。でも検査は日本のようにバカ高ではなく、5000円ちょっとなので、許す。

ホテルでは3食用意してくれて、早速ランチを持ってきてくれた。久しぶりのアフリカご飯だなあ。おいしかった。でもさすがに2日間の旅で疲労困憊して、そのまま次の日の朝まで寝てしまった。

そして次の日の朝、8時過ぎには検査の結果もメールで送られてきて、晴れて解放となりました。ルワンダ、なかなかやるではないか。日本よりよっぽど対応がスムーズだぞ。ガテラもホテルまで迎えに来てくれて、無事再会出来ました。



無事再会を果たしました。
これからまた気合を入れて、戦いに挑む
ため、洗車をしに来ました。
身も心もすっきりして、いざ！

そんなわけで今回のルワンダまでの道のり、なかなか面白かったです。経験したことがないことを味わえるというのは、悪くないですな。でも2度目はなくてもいいかなと思ったのでした。もうこういう疲れることはしたくない。

【ルワンダのコロナ状況】

日本とルワンダ、両方のコロナ状況を見ることができたのは得した気分だった。日本のコロナ対策にイラつく私は、

果たしてルワンダはどうかと気になっていたのだ。

個人的な見解です。コロナ対策、ルワンダの方がいいぞ。わかりやすい。やること、やらないことがはっきりしている。マスクをしていない、変なつけ方をしていると捕まる。捕まって競技場に連れて行かれ、そこで一晩過ごす。反省を促すためですね。

夜は外出制限がある。一時は夜7時から朝5時までという結構生活するには厳しい時間の時もあった。夜7時近くになると、家路につく人たちがバス目がけて走る。逃したら7時帰宅に間に合わない。間に合わなかったら捕まり、競技場に連れて行かれる。だからみんな必死に走る。そして足がもつれて転んだ人が、テレビのカメラにとらえられる。ちょっと笑った。

レストランや施設に入る時は、自分の名前や身分証明書番号、電話番号を記録される。万一コロナ患者が出た時、どこの誰が同じ場所にいたかわかるので、その時は連絡がくる。アナログな方法だし、入る時にいちいち面倒でもあるが、どうせみんなそんなに忙しくないから、この方法は悪くない。

その他結婚式やお葬式の時、集まるのは最高何人までという決まりもある。ちょうどこの時期、ガテラのお母さんが亡くなり、人とおしゃべりすることが大好きだったお母さんのお葬式は、残念ながら少人数でひっそり行われた。

けどやはりコロナ疲れというのでしょうか。外出したい人もたくさんいるのですね。そんな人はいろいろ嘘を考える。例えば日中の外出制限。病院に行ったり、生活に必要な物を買うための外出は許される。食料を買うこともその一つだ。ある人が車の荷台に料理用のバナナの房を入れて走っていた。警官が車を止める。「私は食料を買いに、ほら、その市場まで行ってきたのです。ご覧なさい。荷台にはバナナが乗っているでしょう。」警官はよし、と車を行かせる。翌日もその翌日もその人はバナナを車に乗せっぱなしにして、警官の検問をすり抜ける。が、警官も馬鹿じゃない。同じ手を使ったその人に言う。「お前さん、いつまでその手が通用すると思う？お前のバナナはすっかり腐れて、もう腐ってきてるじゃないか。」と結局その人は捕まり、競技場に連れて行かれた。

そして日本でも一時期マスクが不足したが、田舎の人たち、マスクを買うお金もままならず、市場に行くのに隣の人のマスクを借りて外出したりしているようだ。これじゃ、マスクの体をなしていないではないか。

そんなわけで、国それぞれのコロナ対策、日本とルワンダを比べた場合、なんだかルワンダの方が安心していられるように思います。町を歩くためにはマスクをしていないとダメだけど、多くの人は鼻、さらには口も出た状態でマスクをしています。それでも場所や人種的な免疫力の違いなのか、幸いルワンダでは大きな感染につながっておらず、このまま何とか危機を切り抜けていければと思うのです。

果たして来年はこの状況どう変わっているでしょう。良い方向に向かっていくよう、できる対策はこれからもしたいと思います。



雑文もろもろ

わけのわからない2020年が終わろうとしています。全ての人が戸惑った1年だったと思います。私自身コロナウイルスに当惑した部分もありましたが、それ以上にワンラブに起こった出来事に翻弄されました。それはワンラブが始まって以来の大きな出来事です。

ルワンダの障害者のために続けてきたことが、そのルワンダ政府によって壊された。それを聞いて、人は「なんてひどいことを」と言います。もちろんガテラも私もそう思うところはあります。でも声を荒げたくありません。

きっとそれはそういうタイミングだったのだろうと。

なぜならば今は雨の音を聞いても、以前のように心臓が不安で鳴り響くことがなくなったからです。

ワンラブランドにいた頃は、雨の音が激しくなるにつれ、私の鼓動も激しくなりました。そして部屋の前を流れる川の水位が上がるのを見て、頼むから溢れないでくれと手を合わせていました。

でも今は仮の住いとはいえ、雨が降っても泥水が流れ込むことのない場所にいます。それだけでも良かったのではないかな。つまりあのタイミングであの場所を離れていなければ、相変わらず雨音に恐怖を感じ、下に置いてある荷物を水に浸からないように上に移動させる作業が続いていたのです。そしていずれまた起こる水害に対応し、せっかく集めた寄付がその処理のために使われてしまったのです。

だからもうあの出来事はそういう形で受け止め、この先本当のワンラブの終の場所を作り上げたいと思います。

私はルワンダに行って、ルワンダに鍛えられました。問題が常に起こるその場所。出てきた問題に即対応していくガテラに鍛えられました。だからこの先ちょっとやそっとのことでは動じない自信もつきました。果たしてその自信が役に立つのかどうかはわからないけど、無駄にはならないと信じています。

しばらくの間はしっかり義足を作ることはできないけど、それでも患者さんは訪れます。彼らの期待に応えるよう、必ず新しい義肢製作所を作り上げます。皆さん、機会を見つけてルワンダに来て、その成果を見てください。

【ご寄付をありがとうございました。】

前号を出す頃にご寄付の集計もままならず、しばらくご報告ができていませんでした。スペースの関係から、毎月のご寄付を掲載することができないため、一括してご報告します。皆さま、ご協力ありがとうございました。

2019年12月～2020年10月

合計 円

このおかげで次の製品を配布することができました。今回は洪水被害、強制撤去の関係で十分な量を作ることができませんでした。

義足	12本
装具	4本
杖	45本
車いす	2台

【いろいろと。】

まず一つお願いです。

ワンラブに書き損じはがきや切手などを送ってくださる人、私が日本にいない間に限り、宅急便の受け付けができません。留守中は郵便物はいつもお手伝いしてくれるボランティアのお家に転送されるよう手続きをしているのですが、宅急便の場合は転送がきかず、そのまま送り主に戻されてしまいます。

だからわがままを言ってスマン！それらのものは郵便のみで送るようにしてください。住所は一番下に書かれている茅ヶ崎宛でよろしく！

そして建築現場から報告を。

基礎を作り上げ、今は上に建物を伸ばしていっています。先に書いたようにクラウドファンディングで資金を集めているところですが、節約できる部分は節約を心がけています。壊された建物のレンガを取り出し、それを積み上げて建物を囲っています。でも壁とするには使い物にならないレンガも多く、建物すべてを完成させる量のレンガには至りません。だから今はセメントでブロックを作っています。その方がレンガより大きい分効率が良いからです。欠けてしまったレンガは、義肢製作所の下に敷き詰めて、そこにセメントを流し込んで床にします。壊された建物から取り出したトイレも再利用しようと思っていたのですが、やはり悪い奴はいるもので、ワンラブランドに置いておいたら盗まれました。温水器も盗まれました。窓枠にする鉄骨などは再利用できるものはしています。だからあちこち継ぎはぎだらけです。

最近ルワンダで家を建てる時には、中国から輸入されたタイルや内装の資材を使うことが多いのですが、どうにも安っぽく、また変に西洋的な作りになってしまうので、好みではありません。アフリカでよく見かけるレンガや無骨な鉄骨。そんなものを使っての建築作業です。だからその地域に今建てられているモダンな建物とはちょっと違った作りになるかもしれません。

どうぞ皆さん、出来上がるのを楽しみに待っていてください。そして出来上がった日には、みんなツアーを組んで、ここまで来て下さい。義足工房を見学し、ルワンダのコーヒーを飲んで、見晴らしの良い部屋でゆっくりしてもらえそうな空間を作りたいです。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆さまのご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、ボランティアも常時募集しております。またルワンダで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはありません。

書き損じハガキ、未使用切手は下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。

ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町 12-28-304 TEL: 080-6564-4448

info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.rw(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信69号 2020年12月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project